



## 25年間の変色歯治療から見えてきたこと —変色歯外来—

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
口腔生命福祉学講座 口腔保健学分野 教授

福島 正義

白い歯は古くから明眸皓齒と言われてきたように大衆の関心の的であった。近年、歯科医院で行われるホワイトニング（漂白）は従来の修復処置に比べて非侵襲的であり、漂白効果が実感できることなどから社会の関心が高まっている。

ホワイトニングとは歯の色調を改善して明度を高くすることである。その方法には専門的歯面清掃（PTC）、漂白、マニキュア、ラミネートベニア修復などが含まれる。ホワイトニングの目的・効果は病的変色歯への対応はもちろんのこと、正常色範囲においては自己改造、自信の回復、円滑な対人関係、仕事の成功やアンチエイジングを期待する心理的対応、口腔の健康増進への動機付けとして、う蝕・歯周病予防のための3DS（dental drug delivery system）による予防的対応、あるいは顔面の美容ケアの一つとして歯の美容的対応が考えられる。

演者らの変色歯に関する治療研究のスタートは1987年にさかのぼり、この分野の取り組みは25年になる。さらに1995年に新潟大学医歯学総合病院歯科（旧歯学部附属病院）に国内初の変色歯外来を設置して15年以上が経過した。1980年代はテトラサイクリン変色歯に対するラミネートベニア修復に取り組んできた。1990年代には様々な原因による変色・着色歯に対して包括的に対応するようになり、漂白法も治療オプションに加わった。変色歯外来で見られる変色の原因はテトラサイクリン変色、失活変色、エナメル質形成不全、修復物変色、表面着色、う蝕などである。また、歯の色に対する社会の関心が高まるにつれて、正常な歯の色を有する人でもより白い歯を求めて来院するケースも増えてきた。歯の病的変色は患者の日常生活での心理的負担を想像以上に大きくしている。こうした人々が来院する動機や心理的背景を理解することは治療の決定と治療効果を高める上で極めて重要である。

最近の若者の前歯は歯列不正を別にすると、前歯部の審美性を阻害するう蝕や修復物は確実に減少してきれいである。しかし、健康な歯をより長く健康に維持させるためには歯科的支援が不可欠である。その動機づけとしてホワイトニングは有効であり、その意味でホワイトニング対象人口が増加しているとみることができる。

一方、人口の超高齢化のなかで健康寿命の延伸をめざして中高年者の間ではアンチエイジングの健康志向が高まっている。歯科領域でも高齢者の現在歯数は少しずつ増えている。これまでは歯の加齢による変色は顔のシワやシミと同じように老化現象として捉えられて、歯科的には何ら対応はされてこなかった。しかし、現在ではホワイトニングやマニキュアのような非侵襲的な方法を用いれば、一時的にも口元を若返らせることができる。これからは団塊世代を中心とした元気な自立高齢者のQOLを支援する高齢者審美歯科“Geresthetics”が台頭してくるであろう。

今後、変色歯治療は従来の疾患主導型から健康主導型アプローチに軸足を移していかなければならない。ホワイトニングはそうしたなかで位置づけられるべきものと考えられる。

### 【略歴】

- 1978年 新潟大学歯学部 卒業
- 1982年 新潟大学大学院歯学研究科 修了
- 同年 新潟大学助手・歯学部附属病院（第1保存科）
- 1985年 米国インディアナ大学歯学部・客員研究員
- 1986年 新潟大学講師・歯学部附属病院（第1保存科）
- 2001年 新潟大学助教授・歯学部附属病院（総合診療部）
- 2004年 新潟大学教授・医歯学系（歯学部口腔生命福祉学担当）
- 2010年 新潟大学教授・医歯学系（大学院医歯学総合研究科主担当）